本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

3・11以後日本文学の表象—『それでも三月は、また』における「根源的な喪」の課題—

Some Representations of Japanese Literature after 3.11: About the Subject of "Origin Mourning" in the Collection of Works "Soredemo Sangatsuwa Mada"

doi:10.29714/TKJJ.201212.0006

淡江日本論叢, (26), 2012

作者/Author： 曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page： 97-122

出版日期/Publication Date：2012/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201212.0006

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

3・11 之後日本文學表象
—《即使如此，三月仍舊》中「生存根源喪失」之課題—

曾秋桂
淡江大學日文系教授

摘要

本論文秉持長期追蹤被稱為「第二個戰後」的滿目瘡痍 3・11（東日本大震災）之後，日本文學上產生的變與不變的研究課題方針，完成的一篇研究成果。首先；以收錄同時代複數以上的作家在親身體驗 3・11 之後所發表的作品集：《即使如此，三月仍舊》（2012.2），為考察標的。又因該書於 3・11 屆滿週年前出版，意義深遠。親身經歷 3・11 之後，在面對「生存根源喪失」的課題，人心需重新摸索重生的主力點。彙整此類同時代作家持有的共同集體視點，正是論述 3・11（東日本大震災）之後，日本文學上產生的變與不變的課題的重要一環。

特別值得一提的是《即使如此，三月仍舊》（2012.2）中收錄的 17 篇作品當中，提示為了從「生存根源喪失」當中重新站起來，「找尋確認自己」是實際必要手段之一的作品有重松清著《咒語》(2011)、池澤夏樹著《美麗祖母的聖經》(2012)、角田光代著《拚圖》(2012) 等 3 篇作品。本論文以此 3 篇作品為深入分析標的。

分析結果顯示：此 3 篇作品雖然都不是常見的目前日本社會對「核能發電」發出怒吼般的抗議或激勵受災國民振奮的作品。但是同樣傳達出往內心深處找尋到深耕生命的紮實力量的訊息。作品中傳遞了藉由往本身的內心深處找尋遺忘已久的記憶或生活小點滴，來喚起因 3・11 而深陷「生存根源喪失」的深淵而不能自拔當中，尋覓到深耕生命的紮實力量。此見解的確堪稱新穎。由此可見，後 3・11 的時代中，即將掀起新時代的脈動。

關鍵字: 3・11　《即使如此，三月仍舊》　「生存根源喪失」
自己確認

airiti

Some representations of Japanese literature after 3.11:

About the subject of "origin mourning" in the collection of works "Soredemo Sangatsuwa mada"

Tseng, Chiu-kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper is planned to discern the amplitude which arose in the Japanese literature by 3.11 which are called "second postwar period", and began research. Therefore, this paper used the collection of anthology “Soredemo Sangatsuwa mada” (2012.2) as the text.

17 works are recorded on this collection of works. In it, this paper has taken up three works; Shigematsu Kiyoshi ”Omajinai”(2011)、Ikezawa Natsuki”Utsukushii Sobono Seisyo”(2012) 、 Sumida Mitsuyo”Piisu”(2012) on the theme of "a self-check" which is a concrete means to recover "origin mourning", and stated story structure concretely.

As a result, all three works have told the message of becoming the power which recognition of not the external criticism to a serious "nuclear power plant" problem but the warm recollections in the heart or a daily small occurrence reproduces from "origin mourning" in the present Japanese society. It can also be said that the motion started in Japan what is produced from post 3.11.

Keywords: 3.11, “Soredemo Sangatsuwa mada”, "origin mourning", "a self-check"

airiti

3・11 以後日本文学の表象
―『それでも三月は、また』における「根源的な喪」の課題―

曽秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

本論文は、「第二の戦後」と言われるほどのショッキング的な 3・11 による日本文学に生じた振幅を見極める方針のもと、複数の作家による創作を収録し、3・11 の一周年を迎える前に出版した『それでも三月は、また』(2012.2)をテキストにし、3・11 を体験し、「根源的な喪」の課題に直面し、立ち直る道を模索する、同時代作家が持つ共時的ビジョンを最大公約数的に把握し、試みたものである。

とりわけ、『それでも三月は、また』に収録された 17 本の作品の中では、「根源的な喪」から回復する具体的な手段とされた「自己確認」をテーマとした重松清の「おまじない」(2011)、池澤夏樹の「美しい祖母の聖書」(2012)、角田光代の「ピース」(2012)の 3 作品を取り上げて具体的に論述した。

結果としては、3 作品とも、現日本社会では深刻になった「原発」の問題に向けて厳しく行った外的批判や激励ではなく、心中に深く長く眠っていて、忘れそうな暖かい思い出、あるいは日々の小さな出来事が「根源的な喪」の深淵から着実に生きていく力となるというメッセージを伝えている。ポスト 3・11 から何が生まれるのか、日本ではその動きが始まったばかりとも言えよう。

キーワード：3・11　『それでも三月は、また』　「根源的な喪」
自己確認

airiti

3・11 以後日本文学の表象
―『それでも三月は、また』における「根源的な喪」の課題―

曽　秋桂
淡江大学日本語文学科教授

1.はじめに

2011 年 3 月 11 日（金曜日）14 時 46 分に発生した日本観測史上最大のマグニチユード 9 の大地震を、日本政府は 4 月 1 の閣議で「東日本大震災」とし、それ以降、メデイアもそれに倣い、一本化した[1]。正式な名称「東日本大震災」の誕生について、津村記久子は、「『東日本大震災』という新しい言葉は、ある年代以降の日本人が生まれてから背負ったものの中で、最も大きな重責となったはずだ」[2]と述べた。正式名称が定められた一方、通称は「3・11 大震災」[3]、または「3・11」[4]とされている。更に、3・11 を区切りに、成田龍一はいち早く戦後の日本を「戦後」、「戦後後」と細分した[5]。また、「戦後後」の言い方以外に、陣野俊史は、3・11 以後の日本を「第二の戦後」と呼んだ[6]。「第二の戦後」の言い方の方も徐々に日本社会に定着しているようである[7]。「第二の戦後」の定着は、3・11 が太平洋戦争敗戦の悲惨と同様に見られ、日本社会または日本国民に与え

---

[1]志村有弘編（2011.7）『大震災の記録と文学』勉誠出版 P218
[2]津村記久子（2012.3）「「一人ではない」のその先で」『3・11 から一年 100 人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋 P198
[3]同前掲志村有弘編書 P218
[4]例えば、事件 1 年後 2012.3 に出版した『文藝春秋』臨時増刊号『3・11 から一年 100 人の作家の言葉』では、正式の名前を「東日本大震災」、通称の名前を「3・11」と呼ぶように定着したと見られる。一方、古川日出男(2011.7)『馬たちよ、それでも光は無垢で』新潮社 P102 では、「私は、東日本大震災と名付けられた今回の日本のカタストロフィが、311 とまとめられることには抵抗がある。原発事故はそれ以後も進行中だからだ。むしろ三月十一日以降に深刻化したからだ。しかしメモリアルな記号は人に求められるものだし、それは、わかる」と、別な見方が示されている。
[5]川村湊・成田龍一(2011.6)「特別対談 3・11 からアジア太平洋戦争を照射する」『作家と戦争―太平洋戦争 70 年』河出書房新社 P81
[6]陣野俊史(2011.8)「「3・11」と「その後」小説」『すばる』8 月号 P250 では、「第二の戦後」と呼んでいる。
[7]外岡秀俊（2012.2)『震災と原発国家の過ち―文学で読み解く「3・11」』朝日新聞社 P82、五木寛之（2012.3)「山河破れて国在り」『3・11 から一年 100 人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋 P23、高木のぶ子（2012.3)「散る花の美」『3・11 から一年 100 人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋 P213、藤瀬恭子(2012.7)「信州諏訪とフィリッピン・女たちの地域力」新・フェミニズム批評の会編『<3・11 フクシマ>以後のフェミニズム』御茶の水書房 P162 では、同じ呼び方でさしている。

airiti

た精神的打撃の大きさ[8]を意味するであろう。

3・11の非常時、「文学している場合ではない」[9]という批判があったことに鑑みて、川上未映子は「大震災のさなかに、文学は可能か」をテーマに、「物語はそもそも、数え切れない現実にぶつかったときに、心を修復したり、癒したりする緩和剤の役割をもっている」[10]と明言し、「緩和剤」としての文学作用を主張している。また、真山仁は、「小説を通じて困難な時代を生き抜くための術と覚悟を訴え続けたい。(中略)それが若い世代に対してのせめてもの責任となると信じている」[11]と述べ、自分の役目を「粛々と小説を書く」[12]ことに決めた。津島祐子も「今、こんな状況になった日本で、眼に見えない世界を未来の時間も視野に入れて、言語で描こうとする「文学」の喚起力、あるいは抵抗力が試されている、そう私は思わずに入られない」[13]と触れ、厳しい状況こそ、文学の力の試練の場となることを強調している。さらに、岩見照代は、3・11を体験した自分の世代を次の世代に「根源的な喪」[14]を伝える手段は、「〈言葉〉の力=〈文学〉」[15]だと、文学創作を全面的に肯定している。ただし、別に大事件を文学に盛り込んで創作すること自体を否定したわけではないが、筒井康隆は「起ったばかりの大事件をすぐ小説に書くのは寒い行為だ」[16]と反省しながら、「考えを昇華することが必要である」[17]と、

---

[8]五木寛之（2012.3）「山河破れて国在り」『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P24では、「3・11はすべての日本人の心に大きなショックとして今ものしかかっています」とある。また、林真理子（2012.3）「あの日々」『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P102では、「日本人のほとんどがそうだと思うが、あの日以来、私は晴れ晴れとした日をすごしたことがない」とある。
[9]同前掲陣野俊史論文P249
[10]川上未映子(2011.9)「大震災のさなかに、文学は可能か」『婦人公論』9月号
[11]真山仁（2012.3）「私になにができるのか」『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P207
[12]同前掲真山仁論文P204
[13]津島祐子（2012.3）「「文学」の抵抗力」『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P215
[14]岩見照代(2012.7)「〈3・11〉以後、どのような言葉を立ちあげることができるのか」新・フェミニズム批評の会編『〈3・11フクシマ〉以後のフェミニズム』御茶の水書房P134で、「「〈3・11〉の以前と以後に起きたことを、〈あいだ〉に生きている私たちが、その表象不可能な経験を、私も生きかつ死ぬような「根源的な喪」(デリダ)とでも呼びうる次元から立ち上げ、次の世代にしっかりと伝えること」とある。
[15]同前掲岩見照代論文P136
[16]筒井康隆（2012.3）「虚構への昇華について」『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P92
[17]同前掲筒井康隆論文P92

airiti

文学を書く時点を選ぶことの適切さを指摘している。

作家が震災を題材に取り扱うことについては、矢澤美佐紀は、「作家が、震災以後も自分という書く主体が変容しないと宣言するのも、震災が文学とは直接関係しないとの主張も一つの文学的立場に他ならないだろうが、我々読者が変わってしまったのは紛れない事実である。作品を受容する側の私たち読者の意識は、〈3・11〉以前には決して戻れないのだ」[18]と指摘したように、震災を書く作家群と、震災を書くことに抵抗を感じた作家群では、創作の態度がくっきり違っている。とはいえ、作家の意志を越えて、向こう側には、読者が存在している。作品を享受した読者の意識が変わった以上、日本文学においては、3・11 以前、そして 3・11 以後の日本文学には、当然ながら質的変化が起きたはずである。この点に既に気づいた高橋源一郎は、3・11 以後の日本文学が「ぼくたちが生きているこの世界の問題でもある」[19]と触れ、「既成のどんな論理や倫理も役に立たない。(中略)全く新しい論理や倫理を作り出さねばならない。「以後」の小説の課題は、そこにしかないのである」[20]とも指摘している。また、外岡秀俊は震災後文学作品を再読したことにより得た経験から、「震災によって座標軸が揺らぐと、それらの小説が、当時は思いもよらなかった鮮烈な光を放つことに気づいた。既成の解釈が色あせ、隠れた位相に埋もれていた文脈が、地震によって生じる断層の露頭のように、現れたのである。読み直すと、それらの作品は、過去ではなく今を考える、内省の羅針盤のような力をもっていた」[21]と示唆している。

---

[18]矢澤美佐紀(2012.7)「「生む性」と原発」――津島佑子を手がかりに――」新・フェミニズム批評の会編『〈3・11 フクシマ〉以後のフェミニズム』御茶の水書房 P62-63

[19]高橋源一郎(2012)『あの日からぼくが考えている「正しさ」について』河出書房新社 P298 では、「3 月 11 日以降は、それ以前と同じように「読む」ことも「書く」ことも難しくなった。以前は面白かったもの、面白かったはずのものが、そうは感じられない。以前なら、楽に書けていたことが書けない。それとは逆に、以前には無視していたものが気持ちにすっと入ってくる。あるいは、ふだん通りに書いているつもりでも、書き方が変わっている。それは、こちらの問題でもあり、また同時に、ぼくたちが生きているこの世界の問題でもあるのだろう」とあり、『新潮』2011.11 月号に初掲載された。

[20]高橋源一郎(2012)『あの日からぼくが考えている「正しさ」について』河出書房新社 P298。『文藝』2011 冬季号に初掲載された。

[21]外岡秀俊 (2012.2)『震災と原発国家の過ち―文学で読み解く「3・11」』朝日新聞社 P6

airiti

今後の日本文学における3・11の認識に関する進展はまさにその通りで、文学的特質がどのように変化し、またその変化した振幅が如何なるものなのかは、以上のように極めて大事な課題と言える。

さて、震災後、いち早く震災を書いた創作群を鳥瞰した陣野俊史[22]は、その創作群を創作方法によって、「アナロジー」、「メタファー」、「伝統的書法」、「アナロジーでもメタファーでもなく」の四種類に分類した。また、市川真人[23]は震災後の小説を主題別に「復活」と「持続と闘争」に分けたような論説も見られる。さらに復興と改造のいずれが震災後の課題か[24]をめぐって、論争は跡を絶たない。しかし、震災後から1年が過ぎ、事態の真相が徐々明るみに出ると共に、なお進行中の重要な課題の3・11に関する議論が陣野俊史の纏めた創作方法、あるいは市川真人が分けた主題で説明し切れるかは、今後とも注意深く見守るべきことである。ただ、現時点での1つの試みとして、本論文では、複数の作家による創作を収録した『それでも三月は、また』をテキストにし、ショッキング的な3・11に対する同時代作家が持つ共時的ビジョンを最大公約数的に把握し、日本文学に生じた振幅を見極める試みをおこなった。

2.『それでも三月は、また』を選ぶ理由

2012年2月24日発行の『それでも三月は、また』には、17本の創作が収録されている。発行日からは、3・11が間もなく1周年を迎えるに当たって出された意図が読み取れよう。しかし、なぜこれらの創作を1冊に収めたかの意図は明示されていない。ただ、本書に掲げた「初出」から早稲文学サイトから2本、書き下ろし10本、残りの5本は、いずれも3・11発生時に比較的に近い時点で公表された創作だということが分かった。3・11発生直後の気持ち、そして、発生後1年以内の気持ちを汲み取れる利点があることを考慮し、

[22]同前掲陣野俊史論文
[23]鴻巣友季子・市川真人(2011)「国境なき文学団」『文芸』秋号P238での市川真人の意見。
[24]古井由吉・平野啓一郎(2011.10)「特別対談震災後の文学の言葉」『新潮』10月号

airiti

取り敢えず本書をテキストにした。勿論『それでも三月は、また』に似た趣旨の書物は他にも多々ある筈だが、前述したように、文学の立場から見た 3・11 の研究大系は、今後努力して完成すべきものであるため、今はまさにその目標が出発点に立っている状況であり、本論文をその研究成果の一端として提示したい

３.『それでも三月は、また』収録作品の詳細とテーマ

3.1『それでも三月は、また』に収録された 17 本の創作の詳細

『それでも三月は、また』収録の 17 本の創作の詳細を、創作名、作者、初出、主題、語り手、作品時間に分けて、表(1)に整理した。

表(1) 『それでも三月は、また』収録の 17 本の創作詳細

創作名	作者	初出	主題	語り手	作品時間
①「言葉」	谷川俊太郎	朝日新聞 (2011.5.2 夕刊)	表現手段としての言葉	第 1 人称	3・11 より後
②「不死の島」	多和田葉子	書き下ろし	★原発	第 1 人称「わたし」	3・11 より 12 年後
③「おまじない」	重松清	『文藝春秋』2011.9 月号 (295)	◎自己確認	第 3 人称「マチコさん」	3・11 当日から 5 月の連休まで
④「夜泣き帽子」	小川洋子	『モンキービジネス』2011Summer	安心（眠り）	第 1 人称「自分」	3・11 の直後
⑤「神様 2011」	川上弘美	『群像』2011.6 月号	★原発	第 1 人称「わたし」	3・11 より後
⑥「三月の毛糸」	川上未映子	早稲田サイト 2011.8.15	安心（眠り）	第 1 人称「僕」	3・11 の直前と直後
⑦「ルル」	いしいしんじ	書き下ろし	安心（眠り）	第 3 人称	3・11 より直後
⑧「一年後」	J.D.マクラッチー著ジェフリー・アングルス訳	書き下ろし	当局への批判	第 1 人称「私」	3・11 より 1 年後
⑨「美しい祖母の聖書」	池澤夏樹	書き下ろし	◎自己確認	第 1 人称「私」が「木村」という男の物語を聞いた	3・11 より 3 ヵ月後
⑩「ビース」	角田光代	書き下ろし	◎自己確認	第 3 人称	3・11 以前の 2009 年夏前後
⑪「十六年後に泊まる」	古川日出男	書き下ろし	★原発	第 1 人称「僕」	3・11 の直後
⑫「箱のはなし」	明川哲也	『ろうそくの炎がささやく言葉』勁草書房 2011.8	当局への批判	第 3 人称	3・11 より後
⑬「漁師の小舟で見た夢」	バリー・ユアグロー著・柴田元幸訳	書き下ろし	天災人災に呆れた人間の無力さ	第 3 人称	3・11 より後
⑭「日和山」	佐伯一麦	書き下ろし	「ある世」と「この世」の中間にある「その世」で送った避難生活	第 3 人称	3・11 の直後
⑮「RIDE ON	阿部和重	早稲田サイト	自然災難を乗り	第 1 人称「ぼ	3・11 より 10 年

airiti

TIME」		2011.5.3	越える力となる伝承	く」	後
⑯「ユーカリの小さな葉」	村上龍	書き下ろし	復旧・復興(希望)	第1人称「わたし」	3・11より直後
⑰「惨事のあと、惨事のまえ」	ディヴィッド・ビース著・山辺弦訳	書き下ろし	当局への批判	第3人称	3・11より88年前の関東大震災の直後

表(1)の如く、17名の作家中には外国人が3名いる。グローバル化時代の現状を見ると、日本国籍に拘わる理由は消えてしまうであろう。まして、世界的な経済力を持つ日本で起こった未曾有の3・11に世界各国からの注目が集まることも不自然ではない。3・11をきっかけに無国境への自覚が必要であることは、鴻巣友季子と市川真人の対談[25]でも示唆されている。そこで、本論文では収録された外国人の創作も一貫して論述することにする。

表(1)に示した創作17本のうち、第1人称視点で語った創作は10本、第3人称視点の創作は7本である。その中で、特に池澤夏樹の「美しい祖母の聖書」は、第1人称の語り手の「私」が途中から「木村」という男が語った物語の聞き手になったことが特色と認められる。第1人称視点の創作と、第3人称視点の創作との間に優劣はつけられないが、第1人称視点の創作は自己体験を語る点で説得力があるのに対し、第3人称視点の創作は距離を置いて語る点で客観性を保っているという違いは指摘できる。また、17本中、ディヴィッド・ビース著・山辺弦訳「惨事のあと、惨事のまえ」の1作品だけは、作品時間を3・11以前の88年前の「関東大震災」に設定している。『それでも三月は、また』では、日本国籍以外の外国人ならではの視点といえ、芥川龍之介が「関東大震災」に直面した心境を3・11以後に甦らせる手法により、震災に立ち竦んだ人間の心の脆さは何も変わらず、震災後の惨事はどの時代にも続くことを際立たせる視線は格別である。

3.2『それでも三月は、また』収録作品のテーマ分類

『それでも三月は、また』収録の創作17本のテーマには、3・11

[25]鴻巣友季子・市川真人(2011)「国境なき文学団」『文芸』秋号

airiti

を多角的に見て3・11の打撃を受けた人間模様のバリエーションを描こうとした作家達の姿勢が窺われよう。そのテーマは大まかに、「表現手段としての言葉」(1)、「原発」(3)、「自己確認」(3)、「安心(眠り)」(3)、「当局への批判」(3)、「死者の世界へ彷徨う夢」(1)、「避難生活」(1)、「自然災難を乗り越える力となる伝承」(1)、「復興」(1)の9つの主題になる。以下、概要を一瞥しよう。

まず、巻頭にある谷川俊太郎「言葉」[26]は、その後に続く「言い古された言葉が　苦しみゆえ甦る　哀しみのゆえに深まる」(P9)が後に続く16本の創作を意味すると見てもよかろう。残りの16本の創作のどれもが意味深いものである。例えば、「眠り」の主題では、3・11直後、打撃を受けての不眠に着目した小川洋子「夜泣き帽子」の冒頭部分は、「眠れない夜ほど人間を打ちのめすものはない」(P50)と提起し、「夜、眠れさえすれば、人間はその時間だけ生き延びることができる」(P50)と強調した。そして、「どんな新しい場所に移動しようと、眠りが一番大事でるのに変わりはない」(P51)の記述に続いて、「何もかもが失われた場所で、丸い毛糸の飾りを撫でながら、眠りの世界に横たわる。そうすれば、何の心配もいらない」(P51)と締めくくった。大打撃を受けた後の人々の心的ケアの必要性を訴える主張が見られる。また、川上未映子「三月の毛糸」は、「おやすみ。明日は大変な一日だよ。眠れるうちに、ぐっすり眠っておいたほうがいいからね」(P99)と終わり、「夜泣き帽子」同様、3・11直後の心的ケアをクローズアップした作品である。「眠り」を基調とした創作には、いしいしんじの「ルル」もある。大部屋で避難生活を送る子供達にしか見えない「エアー犬」(P120)が「ルル」と呼ばれ、「その日以来」(P102)、「透明な女の人たちがおりてくるのがみえるようになった」(P102)。そして、この世の生き物ではない幽霊と見た方がよい「透明な女の人たち」と同様、犬「ルル」は震災から大打撃を受けながらも、眠りに落ちていた子供を暖かく見守る。これ

[26] (2012.3)『3・11から一年100人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋P8-9で巻頭詩として掲載されている。

airiti

も被害者の心的外傷を労る趣旨の創作だと理解されよう。

一方、「当局への批判」も大きな主題の一つである。事態の真相が次第に明るみに出るに連れて、3・11を「自然をあどなり、科学への欲望を政・官・財・学・報の癒着による利益の欲望と密着させて勧めてきた結果を突きつけられたのだ」[27]と社会批判の声を上げる「一年後」、「箱のはなし」、「惨事のあと、惨事のまえ」が見られる。J.D.マクラッチー著ジェフリー・アングルス訳の「一年後」では、「政治家たち、答えてほしい　あの動力が　今あるがままにありつづけると　考えたのはなぜか　(中略)原子炉はまだそこに立っている　暖めるもの、殺せるものが、まだあるというのか」(P133)と、3・11から1年後も「元凶」の原子炉が存在させている政治家を批判している。明川哲也「箱のはなし」にも、「国会が紛糾している間に箱不足にはますます深刻になっていった。結局、始まりに明確な一行がないまま、増産計画は実行に移されることになった。大学のえらい教授が、箱の養殖という画期的な発明をしたのだ」(P193)と、「政・官・財・学・報の癒着」への批判が見られる。先のディヴィッド・ビース「惨事のあと、惨事のまえ」にも、地震直後に「惨事のあと、公の記録に関東大震災は一九二三年九月一日土曜日、午前十一時五十八分に始まり、四分後に収まったと記すだろう」(P263)と語った後、2回目に出た似た言葉「惨事のあと、公の記録に関東大震災はリヒター・スケールでマグニチュード七・九、一九二三年九月一日土曜日、午前十一時五十八分に始まり、四分後に収まったと記した」ことに対して、「龍之介は公の記録を信じなかった。龍之介はこの地震が収まることなどないと信じていた。惨事はこれからやってくるのだと信じていた」(P273、下線部論者、以下同様)と語り、当局への批判を洩らしている。

さらに、バリー・ユアグロー著・柴田元幸訳「漁師の小舟で見た夢」は、題名とその結末「日本の海の上に浮かんで、レンタルした

[27]渡邊澄子(2012)「イノチの大切にされる国に」新・フェミニズム批評の会編『〈3・11フクシマ〉以後のフェミニズム』御茶の水書房 P31

airiti

漁師の小舟の寝室で見る夢である」(P208)と呼応する「夢」の話で、「傷つけられた大地に容赦なく広がる、泥まみれのべとべとした裂け目や亀裂」(P104)、「呆然としたかのような空気のなかに、汚染された蒸気が立ちのぼる。永遠なる銀河の、汚染ミニチュアといった趣」(P204)、「巨大な波が、すさまじい音を轟かせて進んでいく。波は奇怪な獣のごとく、頭の代わりに荒れ狂う滝を冠し、体は蛇龍のごとくくねくねとぐろを巻く」(P205)と語る悲惨な状況において生き残った人間が「水道水は目下安全ではないので、彼らはその米を自分たちの涙で炊いた」(P207)。これは自然災害と人災に翻弄された人間の無力を描いたものである。また、佐伯一麦の「日和山」では、「人が流されていくのをずいぶん見てしまったはず」(P234)の登場人物「別府」の息子「航」が口にした「僕たちが今いるのは『その世』なのかな?」(P234)と言った疑問は、正しく語り手の「私」が心の中で呟いた「この世とあの世の間のその世か」(P234)のことである。このように、「ある世」と「この世」の中間にある、耐えがたい「その世」で送る避難生活の辛さを物語っている。

人間の無力さや避難生活の辛さを訴えるのに対して、自然災難を乗り越える力となる伝承を主題とした阿部和重の「RIDE ON TIME」[28]がある。「RIDE ON TIME」では、3・11の津波を「一〇年前にあらわれたのを最後に、以来一度も生じていない、桁はずれのグランド・スウェル。天一面を覆いかねない、あの巨大な海龍のはばたくさま」(P237)と想定し、それを「早春の時期に甦るたび、海龍は人を食らってまた何年も姿を消す」(P201)という伝説に結びつけている。「当の記憶が次代の者たちに受け継がれてゆけば後略の手がかりとなり、後進の犠牲を減らすにちがいない」(P241)と配慮し、さらに、「どんなマニュアルやテクッニクも、そこでたしかに役立つという保証はないとはいえ、歴史の積み重ねが知恵を生み、突破口を徐々に押し

[28]斎藤環(2011.12)「〝フクシマ〟、あるいは被災した時間(第三回)反象徴と〝反復〟」『新潮』新潮社 P292では、「映画ビッグ・ウェンズデー」を下敷きにしている」と指摘した上、この作品を「これほど不慎重でありながらこれほど敬虔な「ツナミ文学」もまたとはない」と批評している。

airiti

開きつつあるわけだ」(P241-242)と、過去から教訓を得れば、「いつもとはまったく異なる金曜日を、いつも通りの金曜日に変えることができるかもしれない。それを信じて、ぼくは今からあの波に乗ってみるつもりだ」(P244)と開示している。ここでは、歴史の積み重ねから得た先祖の知恵を盾に、自然災難と真正面に闘うことで、困難を乗り越える力になると明白に示されている。さらに、この「RIDE ON TIME」より前向きな姿勢の創作は、村上龍の「ユーカリの小さな葉」である。「ユーカリの小さな葉」では、「希望というのはそのユーカリの葉に似ているのではないかと思う。ふとその存在と可能性に気づき、やるべきことを発見し目標を設定して、情報と知識、それに必要なら資金を得て、実行に移していく。その規模にかかわらず、希望の芽は最初にとても小さく、ささやかで、頼りなげに感じられる。実現できるのかどうかもわからない。だが、最初の一歩を踏み出せば、具体的な形を伴った可能性が姿を現す」(P258)と、題名に相応しい説明をしたあと、「希望の芽は個別に、そして確実に生まれている」(P259)と励ます言葉で締めくくられている。これはまさに「復旧・復興」(P258)に相応しい物語の内容である。

以上のように、11 本のテーマを概観した。テーマは、市川真人が「復活」と「持続と闘争」[29]と纏めた震災後小説の主題の範疇を出ていないが、残りの 6 本では、特に今までの日本文学作品にはあまり見られない「原発」3 本、3・11 を背景に果たした「自己確認」3 本は見逃せない。主題は様々だが、17 本の創作のすべてが、「〈3・11〉の以前と以後に起きたことを、〈あいだ〉に生きている私たちが、その表象不可能な経験を、私も生きかつ死ぬような「根源的な喪」(デリダ)とでも呼びうる次元から立ち上げ、次の世代にしっかりと伝えること」と言った岩見照代の論説と合致している。とりわけ、3・11 のショックを受けて、「いま、ここ」を見失うこと、岩見照代の言葉で言う「根源的な喪」から回復する具体的な手段には、「自己確認」

[29]鴻巣友季子・市川真人(2011)「国境なき文学団」『文芸』秋号 P238 での市川真人の意見。

airiti

が見られる。本論文では、「根源的な喪」から回復する具体的な手段とされた「自己確認」をテーマとした3本の創作を取り上げて論述する。なお、残りの日本文学に稀に見る「原発」をテーマにした3本の創作への詳論は、既に別稿で論じた[30]。

4.「根源的な喪」からの回復手段である「自己確認」

4.1 重松清の「おまじない」(2011)に関して

第3人称視点で語った「おまじない」の作品時間は、3・11当時から5月の大型連休明けまでの2ヵ月足らずの間に設定された。「五十年近く生きて」(P25)いる主人公「マチコ」は、3・11の当時、夫、「大学に通う」(P27)娘、「中学二年生」(P27)の息子と、「東京」(P27)で暮らし、「パートタイムの仕事」(P32)をしている女性である。「四十年近くも前」(P26)、「「昭和」の家族は「一つ屋根の下」というのを律儀に守っていた」(P20)環境に育てられ、父の転勤のため、かつて「市立第二小学校」(P35)の「小学校四年生に進級した四月から翌年三月までの一年間」(P25)、被災地を暮らしたことがある。震災後の、「三十八人いたクラスの友だち」(P31)の安否を心配しながら、「義援金を振り込み、救援物質を送ったあとも」(P27)、東京で落ち着かない日々を過ごしてきた。それで、震災後、一人で震災地へ向かい、「自己確認」した後、心の落ち着きを取り戻した物語である。

4.1.1「東京」から「震災地」へと

3・11の震災後の「マチコ」の気持ちは「落ち着かない」の一言で言い表せよう。「マチコ」は、「心の奥深いところがなんとも落ち着かな」(P27)く、「自分はやるべきことをなにもしていない、という思いは消えない」(P27)。その後、「東京の生活が徐々に日常を取り戻しはじめてからのほうが、落ち込み具合は激しかった」(P27)。また、「自分自身の生活は震災前と変わっていないことに、なんとも

[30]台湾日本教育学会によって主催した「2012年度「台湾日語教育研究」国際学術研討会」(2012年12月1日)で口頭発表した論文「3・11以後日本文学の振幅―『それでも三月は、また』における「原発」の課題―」を参照されたい。

airiti

いいようのない後ろめたさも感じた」(P29)。

そういった気持ちを抱きながらも、「五月の大型連休明けにようやく二泊三日」(P33)で、目的が「見つからないまま」(P33)、「マチコ」は一人で「東京」を発ち、震災地に向かった。震災地の風景を目にし、「あの日のあの瞬間を境に、一つの町で明暗が残酷なほどくっきりと分かれた」(P34)ことに対して、「その理不尽さが悲しく、悔しい」(P35)と感じた。その後、避難所に、「東京」で用意したクラスの1枚の集合写真とクラスへの1通の手紙を壁に貼り付けた途端、「マチコ」は「いざ手紙を壁に掛けたあとは、クルッリと裏返ってしまったかのように、理由のわからない不安になってしまったのだ」(P37)。その後、車を運転し、瓦礫を片づけている親子3人に出会い、「なにか手伝えることはないだろうか」(P38)と思い、車から降りようとした時に、「小さな親切、大きなお世話」(P38)と呟いて、止めることにした。結局、「マチコ」は、「東京で落ち込んでいた頃となにも変らない」(P39)と認識した。このように、震災後「東京」から「震災地」に来ても、「マチコ」の落ち着かない気持ちは、相変らないままであった。いわば、「マチコ」は、3・11震災が引き起こした「根源的な喪」からまだ回復していないのである。

4.1.2「おまじない」の伝統を媒介に得た「自己確認」

落ち着かない気持ちを抱いたまま、「最後の最後に町を見渡しておこう」(P39)として、この町から転校する直前に、「ケイコさん」という同級生と一緒にブランコをしたことのある「自然公園」(P39)へと「マチコ」は向かった。その公園で、「マチコ」達と同様に「第二小学校の四年生」(P43)の二人の女の子に出会った。40年前に「マチコ」は父の転勤のために同級生「ケイコさん」と、ここでブランコを漕ぎながら「おまじない」をして再会を約束した。今回「震災」のために、離ればなれになる二人の女の子は、ここでブランコを漕ぎながら、同じ「おまじない」をして再会を約束した。この二人の女の子から、この「おまじない」は「二小だけの伝統なんだよね」(P44)と聞かされた。それは、「ケイコちゃんが友だちの誰かに伝え

airiti

てくれた。その友たちが別の誰かに伝え、年下の子にも広がって、やがてだだ語り継がれる伝統になった」(P44)と、「マチコ」が悟った。その一瞬、「わかった。わたしがこの町でいちばん会いたかったのは、昔のわたしだったんだ、と思った。だいじょうぶ。ちゃんといた。マチコさんがこの町で暮らしたことの証しは、ここに残っていた」(P45)と、「マチコ」は思うようになった。こうして、転校してきた「マチコ」が教えた「おまじない」が、この震災地に言い伝えられていたことを通し、自分がここにかつて存在していたことを確認し、「自己確認」が出来たのである。いわば、3・11 震災が引き起こした「根源的な喪」がこれで回復したとも言えよう。

4.1.3「自己確認」した後、町の復興、友人との再会への祈念

「自己確認」をした後、震災地にいるにも関わらず、「マチコ」は、「ハセガワ」という男の同級生から掛かって来た電話に、「もう東京に帰ってきてるんです」(P46)と嘘をついた。と同時に「マチコ」は「また来ます」(P46)と答えた。その答えは、「マチコ」自身にも、「意外なほど、きっぱりとした口調で言えた。それがなによりうれしかった」(P46)。またこの「マチコ」の答えを、「ハセガワ」も「喜んでくれた」(P46)。「みんなまた元気になって、町も復興して、そしたら同窓会をしましょう」と続いた「ハセガワ」の言葉に対して、「マチコ」は、「はい、と応えた。言葉だけでは足りない。なつかしい町に向かって、頭を深々と下げた」(P47)。その後、ブランコを立ち漕ぎし、「みんな」(P47)、「また次の春」(P47)と、同級生との再会するような「おまじない」を「マチコ」はかけた。

3・11 を契機に、「東京」から「震災地」に駆けつけたが、落ち着かない気持ちは相変らずであった。しかし、かつて自分が教えた「おまじない」が震災地で言い継がれ、伝統となったことを知り、それを媒介に、自分がかつて震災地に存在していた証しを手に入れ、町の復興を祈りながら、次の春に同級生との再会を果たすと確信するようになった。これは、「マチコ」の「自己確認」の過程でもあり、「根源的な喪」の回復するプロセスでもあると言えよう。

airiti

4.2 池澤夏樹の「美しい祖母の聖書」(2012)について

作品時間を3・11から「三ヵ月」(P139)後と設定した「美しい祖母の聖書」は、第1人称視点、「唐牛」(P143)という名の語り手「私」によって語られたが、作品の途中から語り手が「但沼避難所」(P139)で出会った登場人物の「木村謙作」(P143)の聞き手となり、「木村謙作」の語りが物語の中心にすり替わる、重層化された創作である。

簡単に「木村謙作」のプロフィールを見てみよう。「人生五十年」(P147)の「木村謙作」は、「津波ですっかりフラットになってしまった一帯」(P145)だった「松別」(P145)の出身である。「六歳まで」松別にいたが、「東京の親戚の家の養子として入り」(P146)、再び郷里に戻ったのは、「高校生になってから」(P146)、「それ以来、二、三年に一度はこの縁の薄い郷里に顔を出した」(P146)。郷里の松別には、「役場の職員」をしている兄と、若い兄嫁がいる。「木村謙作」は、「工学系の大学を出て大きな電機会社に職を得て」(P146)、「取引先で出会った相手と結婚して」(P146)、子供に恵まれてはいないが、「まずまず満ち足りた生活」(P146)を送っていた。しかし、2つの「異変」を経験したのち、「木村謙作」がもう1つの「異変」である3・11の震災を契機に、郷里を終焉の地に決めるようになった物語である。

4.2.1「木村謙作」にとっての人為的な「二つの異変」

震災前に、「木村謙作」は、2つの「異変」(P146)を体験した。一つは離婚であり、もう一つは自分の会社が乗っ取られたことである。「二年ほど前に」(P146)、「恋人ができたので別れてほしい」(P146)と妻に言い出された。「議論と口論を何度も重ねたあげく」(P146)、「ひびの入った仲はどうせ長くは保たない。ここまでの縁だったと思った方がお互い傷が浅く済む」(P146)と思って、「木村謙作」は妻の離婚を承諾した。それで、「持っていた家財の半分以上は手放した」(P147)。次は、「ずっと一緒にやってきた副社長が社外の勢力と組んで乗っ取りにかかった」(P147)ことにより、「社長の席から下ろされ」(P147)ることになった。乗っ取られた会社と言えば、「海外を相手に

airiti

二十人ほどの社員が食べていけるくらいの規模」(P140)の「電機会社」(P140)である。離婚も会社が乗っ取られたことも、どちらも妻と「ずっと一緒にやってきた副社長」(P147)のような親しい間柄に裏切られたことによって生じた「異変」である。この2つの「異変」は、人為的「異変」と言えよう。「離婚で半分以下になっていた」(P149)「木村謙作」は、さらに会社を「巧妙的仕掛け」(P147)で乗っ取られたという打撃を受けて、「追い詰められて、どうにもならなくただ坐り込んで別の人生を考える力もなくぼさっと日を過ご」(P147)し、「三月くらいぶらぶらしてい」(P149)た。ある意味では、「木村謙作」は現に「根源的な喪」の状況に陥っている。

4.2.2「木村謙作」にとっての自然的な「異変」(3・11)

2つの「異変」を経験して途方に暮れた「木村謙作」は、「元の取引先の一つから、アリゾナにある支店に行ってくれないかと持ち掛けられ」(P149)、人生を立ち直すチャンスが回ってきた。「木村謙作」は、「半端なことはしたくない。これを機にすっかり向こうに行ってしまおう」(P149)と積極的に応じた。仕事先の新天地アメリカに持って行けないが、「どうしても捨てられない」(P149)ものがある。それは「祖父の眼鏡」(P149)、「祖母の聖書」(P150)、「昔の恋人の手紙」(P150)である。結局、それを兄に預けることにし、別松の兄の家に宅配便で送った。「三月十一日の、午後二時から四時」(P151)と指定した宅配時間は、偶然にも「東日本大震災」が起こった3月11日(金曜日)14時46分の時間帯と重なった。その兄の「家があったあたりが津波を被ったところであるのは間違いない」(P151)。死体となった「兄を見つけました。兄嫁の方が今も見つかっていない」(P152)。このようになった以上、木村謙作が送った「祖父の眼鏡」(P149)、「祖母の聖書」(P150)、「昔の恋人の手紙」(P150)のゆくえは永遠に分からないままであった。せっかく立ち直るチャンスが回って来たが、3・11のために無に帰した。この3・11は予想できない「異変」だが、前の2つの人為的な「異変」と比べると、今回は自然災害と言える。結果的には、今回の自然災害が逆に「木村

airiti

謙作」を陥っていた「根源的な喪」から引っ張り出す契機となる。

4.2.3「郷里」と新天地「アメリカ」との葛藤

自然的な「異変」に遭遇した「木村謙作」は、再び新天地アメリカに赴任するか、郷里に残るかという選択に迫られた。「木村謙作」にとって、3・11 前の「郷里」とは、高校生以後、「二、三年に一度はこの縁の薄い郷里に顔を出した」(P146)ところであり、「郷里ではあるけれど別に親しく行き来していたわけではない。兄たち以外には知る人もいないし、むしろ無縁の地と言う方が近い」(P152-153)場所に過ぎない。一方、「木村謙作」にとって、「日本の田舎よりアメリカの社会の方がわかりやすい。外国人という枠が用意してあって、その分を守るかぎり軋轢はない」(P154)。誰から見ても分かるように、新天地のアメリカは、「木村謙作」にとって新しい発展を図るには、「郷里」よりも最適な場所である。しかし、3・11 以後、「木村謙作」は、「無縁」だった「郷里」を見る視線が変わった。「東京に戻ってアメリカ行きの準備を進めようとしたんですが、なぜか気に入らない。あの光景が見えて、おまえはあれに背を向けるのかという声がして」(P152)。「木村謙作」の語りに従って見ると、アメリカ行きの準備に「なぜか気に入らない」ということは、「あの光景」の「声」のためであろう。すなわち、「あの光景」と「声」は、「木村謙作」を「郷里」と新天地「アメリカ」との葛藤から切り離して、「郷里」へ帰らせたのである。

4.2.4「あの光景」と「声」の真相

「あの光景」は、3・11 以後よく「木村謙作」に見られる。「ある光景がしつこく目に浮かんで、それはアメリカに行っても付いてくるだろうから、だからどこに行ってもしかたがないと思った。むしろその光景の近くにいる方がいい」(P155) と「木村謙作」は言っている。それは、「海の中を漂う祖母の聖書。美しい祖母の写真を挟んだまま水の流れに乗ってゆらゆらと揺れながら沈んでゆく聖書。あるいは海底に着いてじっと動かない聖書」(P155)という想像の光景である。それで、「木村謙作」は「失ってしまったものではあるけれ

airiti

ど、ここにいれば写真の祖母の顔をずっと覚えていられそうな気がする」(P155)と思い、津波に流され、現実にはない、兄の家の住所に住民票を移そうと「決断」(P155)した。と共に、「この先、自分が采配を振るう場面があるとも思えないが、それでもここに誰かが外からやって来るのはいいことなんです。兄を含めて役場の職員の二割が亡くなったんですからね。ここの方が自分の使い途があるという気がする。先のことは不安がたくさんあるけれど、でも沖の海の底には美しい祖母の聖書が沈んですいるわけだし」(P156)と、2つの人為的な「異変」に遭遇して以来、今回自然的な「異変」の3・11を契機に探し求めつつある居場所が見つかり、「根源的な喪」から徐々に回復するという安心感を得た。

「木村謙作」の祖母は、「少しアイヌ系の血が混じったのか目が大きくて輪郭がはっきりしたいい顔」(P150)をしている。「お祖母さんにあこがれるとか？」(P150)と語り手の「私」に聞かれても、「まあそれに近かった。だからその聖書も宝物ですよ。むしろ写真の方かな」(P150)と、「木村謙作」は隠さずに祖母に憧れに近い気持ちを打ち明けた。「あの光景」とは、「郷里」の海に沈むはずの「祖母の聖書」で、見えて来る「あの光景」以外に、聞こえて来る「おまえはあれに背を向けるのかという声」(P152)は、「木村謙作」の心の心底から発した自分の声に違いない。この「声」が「あの光景」と相俟って、「木村謙作」をして、「この地域の住民として生きる。(中略)そうやって復旧だか復興だか再建だかを見ていく。この先の人生をそんな風に使ってもいいではないかと思った」(P154)と、その後の人生の方向性を見出したのである。この言葉を言った「木村謙作」の「声には力が入っていた」(P154)。力がこもった言い方こそ、「木村謙作」の「根源的な喪」からの回復であり、自己確認の証しである。

4.3 角田光代の「ピース」(2012)について

東京在住の52才の祐子と50才の祐子の夫、そして夫と不倫している、名を徳井実香という26才の女性の三角関係を語った第3人称

airiti

視点の物語である。「一九八三年、今二十六です」（P158）の記述から見ると、作品時間は2011年3月11日ではなく、1983年に生まれ、26才になる2009年の夏の前に起こった「大規模停電」（P162）前後になる筈である。とすると、わざわざ当作品を3・11特集に編まなければならないその意図を突き止めるべきである。それは単なる誤植として解釈してもよい。しかし、その後に見られる、52才の祐子が26才だった自分を、26才の夫の不倫相手に重ねて見る手法から見ると、2009年に起こった「大規模停電」を3・11に重ねる手法が使われていると考えられるであろう。それ故、本論文では、時間の誤りを誤植とせず、作品時間を2009年の夏の前に起こった「大規模停電」（P162）前後に想定し、考察を進めていくことにする。

4.3.1「大規模停電」その日の出来事

「大規模停電のあった日」（P162）に、「仕事場」（P162）にいて、「このところこんな天気が続いていた。夕方になると急に空が曇り、激しい雷雨になる」(P162)ことをあまり異常に思わなかった祐子は、停電のまま、「午後四時を過ぎて」（P163）退勤した。明かりがついていない店内風景を見て、「何か大きな事件が起きてしまったかのように」（P164）祐子は感じたが、1時間掛かって自宅について、夫の帰っていない家で一人で食事を取ったあと、「明かりのない窓の外を見つめ」(P166)て、「二十六歳のときのことを思い出した」(P166)。

その時、「固定電話」(P165)に電話が掛かって来て、「会社にいる」（P165）と夫は言い、「このまま復旧しなければ会社に泊まるから心配いらない」(P165)と祐子に告げた。その後、夏の温泉旅行から帰った数日後、「その日、べつの女性の部屋いた」（P173）と夫は自分が不倫したことを祐子に打ち明けた。相手の徳井実香が祐子に向かって言った「あの日私たちはいっしょにいたんです」(P158)の言葉からも夫の不倫が歴然と立証された。「大規模停電のあった日」（P162）に、祐子の夫は確かに不倫相手と一緒にいた。しかし、それで祐子が離婚に踏み切ったわけではない。それは、「あんな日に、だんながほかの女の家に泊まっていたと知っても、あなたは別れな

airiti

いんですか」(P161) と不倫の相手に詰問された時、祐子が「もう二度と帰れない場所に二人できてしまったからだ」(P161) と言おうと思ったことが理由である。祐子が理由に挙げた「もう二度と帰れない場所に二人できてしまったからだ」(P161)」とは、祐子が 26 才から抱えている「喪失」に由来すると考えられる。祐子が長く拘っているその「喪失」から「自己確認」が出来たのは、「大規模停電のあった日」(P162)に、夫の帰っていない家で一人で食事を取ったあと、「明かりのない窓の外を見つめ」(P166) て、「二十六歳のときのことを思い出した」(P166) 時であった。

4.3.2 祐子が 26 才に味わった「喪失」

26 才の祐子は、夏に妊娠して父に報告せずに夫と入籍したが、入籍して間もなく、お腹の中の子供は「呼吸を止めていた」(P167)。それで祐子は「飼っていた猫が死んだときも祖母が死んだときも幾日も泣いたが、子どもがいなくなるというのはもっと大きな喪失」(P167) と感じた。慰めてくれた両親、夫の気持ちがありがたかったが、祐子は「みんな人ごとではないかと思った」(P168)。そして、語り手が語ったように、「自分しかわからない喪失は、自分自身で抱えこむしかなく、そのことが祐子にはつらかった」(P168)。しかも、「その未来を、私はずっとこの喪失を抱えて生きていくのだ」(P168) と、祐子は、その時から悲観的に思っていた。特に、「世のなかは好景気の真っ盛りで、だれも未来には幸福しかないと信じていた。そのとき幸福というのは、得ることを意味した」(P167) 時代に、祐子が感じた「喪失感」は格別に深いものに違いない。

4.3.3 共有できる「喪失」を認識

そうした悲観的な日々の中、夫の帰りが遅い 26 才の「夏盛り」(P168) に、祐子は一人で「窓の外を見てい」(P169) て、「自分を囲む果てのない闇に向けて語ってみた」(P169)。その時の祐子は、「声は闇に吸いこまれていくのに、話していると落ち着いた。だれとも共有して得ない喪失を、だれかと分かち合っているような気がした」(P169)。このように、聞く相手がいなくても、「声」さえ出せ

airiti

ば、「自分自身で抱えこむしかな」い「喪失」を誰かと分かち合えると祐子は認識し、気持ちが落ち着くようになった。

4.3.4 祐子の「喪失」---「幸福」と「不幸」を補助線として

26 才の一人でいる場面から 52 才の一人でいる場面へと転換すると共に、「好景気は終わりを告げて、次第に景気は悪化し、回復しないまま新しい世紀に突入した。幸福は得ることではない」(P170) という時代の流れを知っている祐子は、「幸福は得ることではない、それなら不幸は失うことだというわけではないのかしら」(P170) と、二元対立に見える「幸福」と「不幸」は、実は「得る」ことと「失う」ことによって決められるものではないと気づいた。26 才の時、「声」さえ出せば、「自分自身で抱えこむしかな」い「喪失」を、誰かと分かち合って、気持ちが落ち着くようになったと同じように、「幸福は得ることではない、それなら不幸は失うことだというわけではないのかしら」(P170) を「言葉にした」(P170) 途端、「まるで拍手をするかのように町の明かりがつきはじめた」(P170)。この「拍手」は、祐子の「幸福」と「不幸」に対する新たな認識による新しい出発を祝福しているようである。さらに、「なんでもないそれらの断片は、ジグソーパズルのピースのようにかみ合いながらつながっていく。その思いがけないうつくしさに」(P171) に驚いた祐子は「幸福が得ることではないと同様、不幸は失うことではない。失うことはときに不幸かもしれないが、けれど、不幸とは失うことと同義ではない」(P171-172) と認識を一段と深め、「私は、不幸ではなかった」(P172) と自己確認できた。それは「暮らしのなかの、そうしたちいさなことどもは、喪失を埋めることはなかったけれど、でもその喪失は、ちいさなことどもを奪うことはできなかった」(P172) とあるように、これは 26 年間かけてやっと確認できたことである。

4.3.5「自己確認」による「喪失」の昇華

26 年間をかけて確認できた「暮らしのなかの、そうしたちいさなことどもは、喪失を埋めることはなかったけれど、でもその喪失は、ちいさなことどもを奪うことはできなかった」(P172) という認識に

airiti

より、夫の不倫の相手を前にしても、「得ても、失っても、それはえんえんとくり返される。今までいた場所に、私たちはいつだって戻れない。それは失うことではない。不幸の内訳ではない」(P175) と離婚は言い出さず、淡々と見ている。そして、「「ぜんぶをなくしてたわけではないのよ。あたなも、私も」と祐子は、二十六年前の自分に向かって言った」(P176)。このようにして「幸福」と「不幸」を再定義したことにより、夫の浮気に自分を重ね、祐子は 26 年間悩み続けてきた「喪失」から解放され、「なんでもないそれらの断片は、ジグソーパズルのピースのようにかみ合いながらつながっていく」と見られるようになった。「喪失」が奪うことが出来なかった「ちいさなことども」は、題名の「ピース」と呼応し、「喪失」の昇華が提示されているのである。

4.3.6「喪失」を味わった 3・11 の被災者へのメッセージ

2009 年の夏の前に起こった「大規模停電」(P162) 前後の出来事を中心に書いた作品「ピース」を 3・11 の特集に編集した意図は何か。2009 年の夏に経験した「大規模停電のあった日」(P162) により、26 年間抱えてきた「喪失」が「幸福が得ることではないと同様、不幸は失うことではない。失うことはときに不幸かもしれないが、けれど、不幸とは失うことと同義ではない」(P171-172) という認識で「私は、不幸ではなかった」(P172) との自己確認に帰着したこの作品は、3・11 とは無関係のようであるが、実は 26 才の夫の不倫相手と 26 才のときの自分を重ねて見ることにより、26 才から自分が抱えてきた「喪失」の課題を「大規模停電」(P162) をきっかけにした自己確認により昇華したと言える。この作品では、2009 年の夏に経験した「大規模停電のあった日」(P162) の出来事が 3・11 に重ねられている。そこには 3・11 のために深い「喪失」を味わった被災者に、「喪失」を昇華する道があるというメッセージを伝えようとする意図が含まれているのである。

airiti

5.おわりに

第二次大戦の敗戦から立ち上がり、世界有数の経済大国となった日本は、世界で初めての原爆投下を受けたにもかかわらず、経済と文明生活維持のために3・11前まで54基の原発を所有していた。しかし、3・11により、それらが一挙に崩壊する「根源的な喪」に陥った国民が数多くいたと考えられる。経済、政治、エネルギー政策、思想、観光、文学などのあらゆる面において、日本は今、ポスト3・11にある。本論文では、3・11一周年に出版された『それでも三月は、また』の基本モチーフといえる、震災による「根源的な喪」を扱う3作品を取り上げた。各作品とも今の日本社会で「原発」に向けた厳しい外的批判や震災被害者への激励ではなく、心中に深く長く眠っていて、忘れそうな暖かい思い出、あるいは日々の小さな出来事が「根源的な喪」の深淵から着実に生きていく力となるというメッセージを伝えている。ポスト3・11から何が生まれるのか、今まさに日本ではその動きが始まったばかりである。

テキスト

鈴木哲発行(2012)『それでも三月は、また』講談社

参考文献

茂木健太郎編(2011.5)『わたしの3・11あの日から始まる今日』毎日新聞社

川村湊・成田龍一(2011.6)「特別対談3・11からアジア太平洋戦争を照射する」『作家と戦争―太平洋戦争70年』河出書房新社

河出書房新社編集部編（2011.7・初2011.6)『思想としての3・11』河出書房新社

志村有弘編（2011.7)『大震災の記録と文学』勉誠出版

古川日出男(2011.7)『馬たちよ、それでも光は無垢で』新潮社

陣野俊史(2011.8)「「3・11」と「その後」小説」『すばる』8月号

川上未映子(2011.9)「大震災のさなかに、文学は可能か」『婦人公論』

airiti

9 月号
池澤夏樹（2011.9）『春を恨んだりはしない震災をめぐって考えたこと』中央公論新社
鴻巣友季子・市川真人（2011）「国境なき文学団」『文芸』秋号 P238
古井由吉・平野啓一郎（2011.10）「特別対談震災後の文学の言葉」『新潮』10 月号
高橋源太郎（2011.11）『恋する原発』講談社
辺見庸（2012.1）『瓦礫の中から言葉を私の＜死者＞へ』ＮＨＫ出版
高橋源太郎（2012.2）『「ある日」からぼくが考えている「正しさ」について』河出書房新社
河出書房新社編集部編（2012.2）『歴史としての 3・11』河出書房新社
外岡秀俊（2012.2）『震災と原発国家の過ち―文学で読み解く「3・11」』朝日新聞社
（2012.3）『文藝春秋　3・11 から一年 100 人の作家の言葉』臨時増刊号文藝春秋
新・フェミニズム批評の会編（2012.7）『〈3・11 フクシマ〉以後のフェミニズム』御茶の水書房

本研究は 101 年度国科会専題研究 101-2410-H-032-087-による研究成果の一部である。なお、本論文の一部は 2012 年 12 月 1 日の台湾日語教育学会主催「2012 年度台湾日語教育研究国際学術研討会」での口頭発表の内容と重なっている。

◇2012 年 10 月 30 日受理 ◇2012 年 12 月 10 日審査通過